
Remember

小西いよ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e m e m b e r

【Nコード】

N 1 3 4 3 B

【作者名】

小西いよ

【あらすじ】

十一月七日。木城友典は屋上から飛び降りた。友人、阪本木葉の目の前で。二人を取り巻く人間と、木葉の七日間を描いた物語。オムニバスかもしれない形式。シリーズ一本で淡々とした話です。

ブローグ

十一月七日、午後一時。予鈴が鳴る五分前の事だった。

「木葉。お前は、頑張れ」

普段と何ら変わらぬ落ち着いた声音で告げられ、顔を上げれば既に彼は金網の向こう側にいた。

立ち上がる事も出来ずに目を見開いて座ったままにいる俺に彼は小さく手を振って、地を蹴った。がしゃん、掴んでいた金網が音を立てて軋む。

「え……」

漸く反応出来た次の瞬間彼の姿は消え、暫くして鈍い音が下から聞こえた。

+++

きじょうのもの

木城友典は、俺の唯一の友人だった。

出会ったのは中学の時で、その頃は違う学校に通っていて家も遠かったし、共通点なんか無かった。だから「昼間」に出会う確率なんて5%にも満たなかっただろう。

木城友典と俺が出会ったのは、暗闇が増幅される深夜の事だった。あれは、静かな夜だった。

ぼんやりとした月の灯りに浮かび上がる、白い闇路を歩いていた時の事だ。前方から歩いてきた彼と擦れ違った。

同年代の、普段は見ない顔だなと。最初に抱いた興味はその程度だった。だけど俺が興味を抱くと言うのはとても珍しい事で、これ何かあるかもしれない。そう思って声を掛けようとした。

だが、話しかけたのは友典の方だった。微笑を浮かべた口許がゆっくりと開かれる。

「お前だろ。この辺り毎晩一人で彷徨ってる中学生って」
「だったら？」

俺は挑戦的に笑って返した。

丁度良い、声を掛ける手間が省けた。反応次第では素通りしてやるう。

胸中でそんな事を思いながら言葉を待つ。

俺に興味を持って声を掛けてくる人間と言えば、目的は大体決まっている。

態度が気に入らない。これは悪意。

一人で寂しそう、仲間に入れてあげる。これは善意ではなく同情であり勝手な思いこみだ。

あとは力ツアゲ。動機は単純な金銭目的と憂さ晴らしで、相手が俺でなければならぬと言う訳ではない。

さて、彼はどれかな。

今まで年上から声を掛けられる事が多かったから、見た目同年代の少年は異質で、なんとなく興味がある。

彼は暗い夜道に映える少し濃い色の唇にゆつくりと弧を描いた。目は眩しそうに細められ、俺から見ても「人好きのする笑み」だと分かる。邪気のない、友好的な物だ。

だが油断してはいけない。夜の人間は平気で仮面を被る。それこそ年齢なんか関係無い、弱肉強食の世界だ。食われた方が負け。心を許した時点で負けなのである。まだこの世界に出入りするようになって一年もしていないが、そうした場面に俺も何度か遭遇してきた。

彼はこの笑みをどの方向へ向けるつもりだろう。疑り深くその様を観察する。

やがて、彼の朗らかな声が空気を震わせた。

「俺と友達にならない？」

冷たい空気を引き裂くように届いた凜とした響きに、少し拍子抜けする。同時に、脳の中で「興味」が急激に冷めていくのを感じる。なんだ、そんな事か。がっかりして胸中で呟きながら、少しも面白みの無くなった彼にヒラリと背を向けて歩き出す。

「却下」

「そんな即答しなくても……。別に悪いようにはしないぜ？」

短く答えてやったのにもかかわらず、しつこく背中から声が伸びる。歩き出せば後ろからも足音が聞こえ、ウンザリと溜息を吐いた。これは納得するまで諦めそうにない。

仕方がなく、振り返らずに言葉を返す。

「それ、俺に何のメリットがある？ 興味本位で関わって来るのはやめて欲しいんだよね。第一俺は、誰とも連む気なんか無いんだ」「俺はさ、お前が羨ましいんだよ」

突拍子もない言葉に、ピタリと俺の足が止まる。「羨ましい」と言う単語に、少し興味が湧いた。

振り返れば相変わらずの邪気のない笑みと視線が絡む。腹の底が読めない。

「羨ましい？」

「そう、羨ましい。俺もそう在りたいから、お前と友達になりたいんだ」

「……在りたいならそう在れば良いのに」「出来ないからな」

細められた黒い瞳に、異なる色が一瞬だけ含まれたように見えた。それは腹の底を垣間見たように思えて、その一瞬だけドキリとする。けどすぐに邪気のないソレへと戻って、笑みは深まった。

「メリットは、退屈しのぎの提供」

穏やかな声で放たれた退屈しのぎと言う言葉に興味は湧かなかった。ただ、こいつが一瞬だけ見せた「腹の底」と、羨ましいと言う言葉だけが脳に残る。

誰かから蔑まれる事はあっても、羨まれる事なんて今まで一度たりとも無かった。面白い。俺をどうしてそんな風に思うのか、こいつの腹の底を知りたい。

ただそれを、すんなり認めてしまうのは面白みがない。これこそ退屈しのぎかもしれない。

俺は横一文字に結んでいた口の端を上げ、緩やかな笑みを作った。「そんなものはいらないけど……。一つ、条件がある」

「条件？」

ポケットに手をつ突っ込んだままにいる俺に、彼は小首を傾げた。勿論こんな物は愛想ばかりの相づちで、少しくらいは予想していただろう。でなければ余裕の笑みなんて浮かべてはいない。

「この近辺で一番星が見える所。俺は明日、そこにいる。それがどこか、当ててみなよ」

そうしたら友達になってやる。

言い捨てるように少し愉快的口調で告げて、俺はもう一度背を向けた。

それからどうなったかは、今の俺と友典の関係を見れば分かるだろう。友典は俺のたった一人の友人だった。条件の結果がどうであったかは別にして、これが俺と友典の出会いで、始まりであった事に変わりはない。

そんな木城友典が、十一月七日午後一時。

自らが通う高校の屋上から、飛び降りた。

プロローグ（後書き）

亀並みの執筆ペースですが、よろしければお付き合いください。

一日目 木城成子と木城智典（１）

彼と出会って二年目の、今から三年前。私は旅行鞆一つに日用品だけを詰めて、家を出た。

理由の一つが出来ちゃった婚。と言っても両親の承諾が得られなかった為、籍は入れていない。

私は良かったんだけど、彼はそう言う所に律儀だ。本当は、半ば駆け落ちと言える私の家出状態もあり良くは思っていない。だけど彼は優しいから、笑って私を受け入れてくれた。下心もある、と本人は曰くが。

家を出たもう一つの理由は、厳しすぎる両親への辟易だ。厳しすぎると言うよりは、期待が大きすぎたのかもしれない。

私は両親の為に良い成績を取って来て、父の職である弁護士になる為生きてきた。ルールどころか、四方をガチガチの絶壁に囲まれた道を歩いてきたようで、酷く息苦しかった。

私の転機は、今から五年前。彼との出会いだ。彼は、私の崖を見事に突き崩してくれた。

だから私は彼の元へ行こうと決意し、家出するまでの覚悟を持てたのだ。このままじゃ私は駄目になると、ハッキリ自覚出来た。

その事に後悔はない。これからを考えなければいけないとは思っているけれど、今の生活には満足している。

一つ気がかりがあるとすれば、歳の離れた弟の事だ。五つも離れていたから喧嘩なんか無く、父親譲りで頭の良い、けどとても優しい自慢の弟だった。

繊細なあの子に両親の過剰な期待が向いているのかと思うと、ゾツとする。家を出てから三年間、手紙やメールで連絡は取り合っ

いるし時々会ったりもしているけど、心配でならない。

+++

「あれ……？」

携帯電話を開いて、私は思わず呟いた。朝食をテーブルに並べる彼は耳聴く私の声を拾ったらしく、

「どうかした？」

と、首をかしげて問いかけてきた。

私は薄紫色の四角いそれを折りたたみ、眉根を寄せて彼へ目を向ける。

「うん、智典から返事が返ってなくて……」

「智典から？」

聞いた途端、私と同じく彼も怪訝そうに首を傾げた。智典の事は彼もよく知っているし、毎日メールの遣り取りをしているのも知っている。だからこそ、私と同じように訝しんだのだ。

たった一日くらいで、と、他人なら言うだろう。だが智典をよく知る私たちにとって、それは不安を十二分に掻き立てる要素だった。

「自宅には電話した？」

私の正面に座りながら首を傾げる彼。

彼の言った事は先ほど返事がない事に気付いてすぐに考えたけど、今は少し遠慮したいと思い直した。

私は、どう答えるべきか少し躊躇う。しかしここで嘘を吐くのは、事情を知る彼に対しては無意味な事だ。私は少し目を伏せて、正直に言うしか無かった。

「今の時間だと父さんがいると思うから……。十時頃かけてみる」
言い終えた矢先、彼はどこか切なげに顔をしかめる。困っている

のでも呆れているのではなくこれは、単純に切ないのだろう。あと、罪悪感なんかも感じているのかもしれない。

「成子^{せうこ}がそうしたいなら、そうすると良いよ」

ややあつて呟いた彼の声は、予想通りに張りが無かった。

+++

母との電話を終えて、現在十一時。私は、智典が通っていた学校の廊下を歩いている。

「木城くんの、お姉さんでしたか。この度の事故は誠に不運で……」
前を歩く「教頭」と名乗った中年の男は、愛想ばかりに声を落として言った。私は曖昧に、「いえ、事故ですから……」と呟いて返す。

複雑な心境だった。母の話では確か、事故ではなく、飛び降りだったらしいから。どうしてか分からないと涙声で語った母の声は未だに耳に張り付いて、けれども一向に現実感を持つとしない。

だけど、母に教えてもらった病院へ行つて先ほどその姿を見たのだ。智典が「屋上から落ちた」と言う事実は、この時点で私の現実となっていた。

包帯だらけの痛々しい姿で、集中治療室に眠る弟は、髪の毛を茶色に染めていた。

髪を染めたとは聞いていたけど、予想外に赤かったからこれはひよつとしてよく似た他の誰かではないかと思つてしまふ。けれど、目の下のホクロの位置や、忘れもしない優しそうな垂れ目。閉じられているけれど、それらは確かに記憶の中の弟と合致した。

そして今度は、それが本当に母の言う飛び降りだったのかを調べにこうして学校を訪れている。教員は気を利かせたのか、それとも別の理由からか、事故だと言い張った。

恐らく後者だろうが、現場を見ない事には納得が出来なかったのだ。だから、屋上への案内を頼んだ。

一步一步、階段を上る足が重い。智典の足取りも、こんな風に重かっただろうか。と、無意味な事を考える。

それは智典にしか分からない事で、考えても今更仕方のない事だった。

前を歩く男が、ドアノブに手を掛ける。どうやら鍵は掛かっていないらしく、ノブはするりと簡単に回った。

飛び降りがあった後なのに不用心だな、と、思った矢先。男は私の目の前で苦々しげに舌を打った。

「坂本のヤツ、また……」

誰の事だかは分からないが、どうやら快く思っていない存在らしい。明らかに不快そうに呟いた声は怒りを含んで低かった。

私は、「坂本」の事を尋ねようと口を開きかけた。しかしそれは乱暴に開け放たれたドアの音によってかき消される。

解放されたドアの向こうには、手すりにもたれ掛かる少年の後ろ姿があった。

一日目 木城成子と木城智典（1）（後書き）

亀並みにのろのろ執筆中です……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1343b/>

Remember

2010年11月10日15時00分発行